

Title	現代小説としての『テキサコ』
Sub Title	Texaco comme roman contemporain
Author	林, 栄美子(Hayashi, Emiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.43 (2006. 9) ,p.21- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20060930-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代小説としての『テキサコ』

林 栄美子

序章 『テキサコ』再読

1980年代半ばごろから1990年代にかけてのころだろうか、様々なジャンルで「クレオール」という言葉がさかんに聴かれるようになっていた。最初は音楽、それもポピュラー・ミュージックの世界だったような記憶がある。多分ジャマイカのレゲエあたりから始まって、カリブ海の島々（大小のアンティール諸島）や、アメリカ合衆国南岸や南米の北岸などを含むカリヴ地域の音楽が、次々と紹介され始めた。ジャズやブルースやロックとも根っこのところで関わりが深く、いくつもの人種・文化が混交する地帯だからこそ生まれる独特のフュージョン感覚が新鮮であったためか、それらの音楽は一時かなりミュージック・シーンを席卷していた。筆者が「クレオール語」（フランス語のクレオールであるが）なるものを初めて実際に耳にしたのもその頃であったと思う。

このカリブ海からの風は、さらなる文化的広がりを持っていた。文学や映画の分野で力のある作家たち¹⁾が次々と現れ始めるに従って、「クレオール」の歴史的・文化的背景にも関心がもたれるようになっていった。異民族・異文化が衝突し、混交しあう、混沌たる状況が世界のあちこちに目立ち始めたおり、歴史的に元々そのような環境を持っていた「クレオール」の成り立ちと現在の状況が改めて注目を浴びた、ということでもあろう。とりわけ文化人類学や民俗学の領域で、興味深い示唆的な仕事も発表されている。

フランス文学のなかでもこの動きは久々に、小説の分野で興味深い作家たちを生んだ。とりわけ、いずれもマルチニック出身である、パトリック・シャモワゾ Patrick Chamoiseau とラファエル・コンフィアン Rafaël Confiant

の二人である。まず、コンフィアンが1991年に『コーヒーの水 *Eau de café*』²⁾で11月賞を、ついで1992年にはシャモワゾが『テキサコ *Texaco*』³⁾でゴンクール賞を獲得するに至って、クレオール作家はフランス文壇でも「フランス文学」の作家として認知されることとなった。かならずしもフランス本国出身でもなければフランス語を母語ともしない、フランス語で書くことを選んだ「フランスの作家」たちの登場は1980年代後半からすでに始まっていたが、このマルチニックの2人の作家はこの流れを現代フランス文学のなかで看過し得ないものとし、「フランス文学」全体の枠組を見直させる役割を果たした。

彼らは小説を発表するだけでなく、「クレオール論」のような書物を発表していた。1991年に二人の共著として発表した『クレオール文学 *Lettres créoles*』⁴⁾は、フランス語圏クレオール地域における文学の発生・歴史とその現在を初めて綿密に調べあげてまとめ、そのことによってクレオールとは何かを探求し、クレオールであることを力強く肯定する力作であった。それ以前にもすでに1987年には、彼ら2人にギアナ出身のジャン・ベルナベ *Jean Bernabé*を加えた3名で『クレオール礼賛 *Eloge de la créolité*』⁵⁾が出版されている。こちらはクレオール作家たちによるクレオール宣言のような маниフェスト性の強い内容であったため話題になったが、作品としては『クレオール文学』のほうが質・量ともに優れていると筆者は考える。

さて、シャモワゾの『テキサコ』は当時パリの書店ではどこでも山積みになっており、人気のある作品であることを窺わせた。かなり分量のある作品であるが、現代小説がしばらく忘れていた、物語としての面白さや吸引力に満ちていた。マルチニック島はフランス共和国内の自治領であり、あくまでフランスの一部であるにもかかわらず、本国のフランス人にとっては今なおエキゾチックな魅力をたたえているせいもあろう。しかしこの奇妙なエキゾチスムはクレオール作家にとっては両刃の剣である。そこに文学があるなどとは普段思ってもみなかったであろう（偉大なエメ・セゼールがすでにいたにもかかわらず）多くの本国フランスの読者たちの興味を引き、クレオールの何たるかを作品をもって知らしめることができる一方で、「新たなエキ

ゾチスム」の目新しい商品として消費されるだけで終わってしまう危険も孕んでいるからである。

『テキサコ』は確かにエキゾチックでカラフルな年代記的物語という顔を持っている。それにしてもこのタイトルがまず奇妙である。表紙に記された Texaco という綴りを見て、思わずあのアメリカの大手石油会社のガソリンスタンドを連想してしまい、そんな馬鹿な、と頭の中で打ち消したのは、筆者ばかりではあるまい。読んでいくうちに、その連想はあながち間違いではなかったことが分かるのだが……。

テキサコとは、作中で、マルチニックの首都フォール・ド・フランス市の周辺にあると設定される一地区の名である。奴隷制度廃止によって農園から解放された後、一時は山に上がって生活していた黒人たちが、やがて生活のために街（この作品ではクレオールに独特の《l'En ville》という語が用いられており、翻訳者は「街場」という訳語をあてている⁶⁾）に降りてくる。急激な人口増加で街中には住むところがないので、彼らは街の周辺部分の空き地に勝手に（いわば非合法に）粗末な住居を作って住み着くようになり、それが集まって集落のような一つの「地区 quartier」を形成する。テキサコもそうした「地区」の一つであり、海岸に近い石油タンクの立ち並ぶ地帯のなかの、テキサコ社の石油タンクを囲む空き地の部分に家を作ったので、「テキサコ地区」と呼ばれるようになった、とされている。そうした「地区」はやがて市当局によって立ち退きを命じられ、再開発という名目で強制的に整理される運命にあるわけだが、住民がそれに従わないと強制撤去の対象とされる。テキサコ地区は何度も強制撤去処分にあいながら抵抗を続け、ついには正式な市の一部として環境を整えてもらうという扱いを勝ち取るのである。

小説『テキサコ』の主軸になっている部分は、テキサコ地区を創設したマリ＝ソフィ・ラボリユーという女性が語るテキサコの年代記である。マリ＝ソフィは、植民地の農園（アビタシオン）の黒人奴隷であった祖父母の代の話から語り起こし、やはり奴隷として生まれた父と母が、のちに解放されてから出会い、娘である自分が生まれ、成長して街で働くようになり、や

がてテキサコを創り、拡大し、存続のために闘い続けてきた女闘士 *femme-matador* としての人生を、概ね時間の流れに沿って、滔々と語っていく。

物語としての面白さ・力強さに満ちたこの小説は、同時に「クレオール論」としても読むことができ、「ポストコロニアリズム」の視点に基づく諸議論にとっても、格好の題材を与えてくれるだろう。一方では女性の一代記という伝統的形式の傑作としても、ところによってはフェミニズム小説としてさえ読める部分をも持っており、その奥行きは深く、豊かである。

しかしながら筆者は、最近、20世紀のフランス現代小説を、とりわけヌーヴォーロマンを再考してみる機会があった折に、その後のあまりパツとしない状況を展望するなかで、この『テキサコ』をあくまでもフランス現代小説の流れの中で捉え直してみるとどうだろう、という興味が湧いてきたのであった。もちろん、仔細に見ていけば実に緻密に考え抜かれた構造をもっているらしいこの『テキサコ』に以前から心を惹かれており、筆者にとっては気になる作品であったからでもある。

そうした意識を持って再読してみると、案の定、これはやはりヌーヴォーロマンを経過したあとの、いかにも現代文学ならではの構造を持った作品であることが明白に見えてきた。とりわけ「語り」の構造へのはっきりした方法意識が見出される。そしてそれを明らかにすることによって、この小説の「クレオール文学」としての顔が、より鮮明に浮かび上がってくるのである。

以下に、概略をまとめてみよう。

第1章 『テキサコ』の語りの構造に見られる注目点

1. 「聞き書き」形式という装いのもとに

『テキサコ *Texaco*』のという一大絵巻を編み上げているテキストの語りの構造は、一見単純に見える。いわゆる典型的な、「聞き書き」形式——インフォーマントの語りを聞き手が書き取って文章化していく、という設定になっているからである。テキサコ地区を創設したマリ＝ソフィ・ラボリユー Marie-Sophie Laborieux という女性自身によって語られる、テキサコの壮大な年代記。それを書き取るのは、「言葉の聞き書き係 *le Marqueur de*

paroles』と小説内では名づけられている一人の男である。このような民俗学研究などにおける「インフォーマント」と「聞き書き役」＝研究者の関係に相当するような二人によって、テキストは進んでいく。もちろん、『テキサコ』は小説である以上、そのような二人の役割自体が架空の設定である。二人とも作者の被造物であり、作者シャモワヅはその「聞き書き役」の後ろに隠れている。文中では、「言葉の聞き書き係 le Marqueur de paroles」はしばしばマリ＝ソフィという「語り手 l'Informatrice」から「駱駝鳥さん Monsieur Chameau-Oiseau」とか「シャム鳥 Oiseau de Chame」などと呼びかけられており、作者は意図的に自らを「聞き書き係」と重ね合わせている。

このように、作者が「聞き書き係」を装い、語り手の話をじかに聞いているような幻想を読者に与えつつ物語を進めていくのは、小説の方法としてはむしろ古典的手法の一つでさえある。この手法で書かれた有名な小説の例はいくらでも挙げることが出来るだろう。

しかし『テキサコ』のこの一見分かりやすい構造は、あくまで見かけ上のものでしかない。読者を虚構の中に自然に誘い、いつの間にか手中に引き込んでいくためには実に有効なこの方法をおおいに活用しつつも、シャモワヅはそこにさまざまな仕掛けを幾重にも張り巡らせている。その点に我々はいま少し注意深い眼を向けてみる必要がある。

2. パロール／書き言葉 あるいは クレオール語／フランス語

まずは、『テキサコ』の虚構の設定の内部での仕掛けを見ていこう。

もともと「聞き書き」とは、話し言葉 parole を書き言葉 écriture に置き換えることであり、すでにそこでは言葉を別の次元に変換する作業が行われているのである。『テキサコ』のなかでは、これはより大がかりな変換作業になる。つまり、マリ＝ソフィの語りは、彼女の日常言語であり母語であるクレオール語⁷⁾で行われているはずであり、それがフランス語のテキストに変換されていることになる。パロールとしてのクレオール語からエクリチュールとしてのフランス語へ。

クレオール地帯の成立の背景を何よりもよく映し出しているものとしてのクレオール語（この場合はフランス語のクレオール）から、元宗主国の言語であるフランス語へ。労働現場の言葉として生まれてきた、本来文字を持たない話し言葉クレオール語から、厳然とした体系を持つ文章語としてのフランス語へ。あるいは植民地に生まれた支配される者の言葉から、支配する側の宗主国の言葉へ。さまざまな言い換えが可能であるということは、この移行そのもののなかに多層な意味が読み取られる可能性を示している。少なくとも、この二つの言語は、ニュートラルに並置できるほど対等な関係にはないのである。（実は、あらゆる翻訳はこの問題を孕んでいるわけだが。）この移行のなかにシャモワゾが潜ませた諸問題を、さらに仔細に取り出してみることしよう。

奴隷たちが白人の農園経営者たちに一方的に支配されるという関係の労働現場のなかから生まれてきたクレオール語は、その成立過程ゆえに、本来文字を持たない。あくまでも日常の口語である。奴隷制度の廃止後、この土地の子供たちが学校教育を受けるようになると、彼らが白人の教師から学校で習う言葉はフランス語である。読み書きを学ぶということは、フランス語を学ぶことと同義なのである。

クレオール社会は、支配階級である白人入植者（ベケ）、白人と黒人の様々な混血（ムラート）、元農園奴隷であった黒人（ニグロ）、インドや中国などから来た下層の契約労働者（クーリなど）、逃亡奴隷（マルーン）等々と、実に細かい階層に分かれているが、その階層を上がっていくために重要な条件は、少しでも肌が白いこと（自分より少しでも色の白い者と結婚することで、後の世代の肌の色を脱黒色化していこうとする傾向があった⁸⁾）と、フランス語を操る能力が高いこと、であった。そしてその階層の最上部のさらに先には、海のかなたのフランス本国がある。

19世紀に、ムラートやニグロの中産・知識階級が誕生して、文学作品が現れるようになるが、それらはほとんどフランス文学の程度の低い模倣のようなものであった。

真の意味での「クレオール文学の祖」と言えるのは、20世紀になってこ

の地に生まれた天才詩人エメ・セゼール Aimé Césaire であろう。彼は、優れた詩作品をフランス語で（しかし、彼独特の燃えるようなリズムを持ったフランス語で）書いている。パリ留学の折に、セネガル出身のレオポルド・サンゴール Léopold Senghor やギアナ出身のレオン＝ゴントラン・ダマス Léon-Gontran Damas などの黒人学生たちと知り合い、彼らが起こした「ネグリチュード *négritude*」の運動はあくまでも文学運動ではあるが、黒人であることに積極的な価値を見出し、自らを貶めるヨーロッパ的な価値観の呪縛から、自分たち自身を解放しようとする試みであり、黒人自身による文化的・政治的尊厳回復の運動でもあった。彼らは、宗主国フランスの首都パリで、フランス語で語り合うことによって知り合い、フランス語で雑誌『黒人学生 *L'Étudiant noir*』を出し、フランス語での文学運動を繰り返したのである。つまり、パリという場所とフランス語なしでは、彼らの出会いも、尊厳回復の運動も有り得なかったのであり、支配言語の普遍的な力に支えられていた、という面もあるのである。

他方、セゼールが帰郷したのちに書き続けていた詩作品の一つが、1941年、ヴィシー政権下のフランスから逃れてメキシコに向かう途中でマルチニックのフォール・ド・フランスに寄港せざるをえなかったアンドレ・ブルトンの目にとまる⁹⁾。(まさしくシュルレアリスムの出会いとも言える偶然によって!)『帰郷ノート *Cahier d'un retour au pays natal*』(1939/47)¹⁰⁾はフランス本国で出版され、高い評価を受けることになる。やはりフランス語の力によって、しかしセゼール自身の、セゼール独自の詩の言語の力によって。

エメ・セゼールは、1945年から93年までの長きに渡り、フォール・ド・フランス市長であり、フランス国会議員として議席を保ち続け、その政治上の功績によっても、精神的な「マルチニックの父」となり、敬愛をこめて「パパ・セゼール」と呼ばれた人である。

セゼールの息子の世代である、シャモワゾやコンフィアンたちは、セゼールによって覚醒させられたと同時に、「父」の限界や問題点を見極めてもいる。セゼールは「黒人性 *négritude*」を積極的に受け入れるために「アフリカへの回帰」を掲げた。海の向こうのフランスから精神的に独立するためと

はいえ、それでは結局のところアフリカをフランスに置き換えて、やはり拠り所を「外」に、別の「外部」に求めることになるのではないか？ 方向を変えただけで、架空のオリジンに依拠するという点では変わらないのではないか？ クレオールであるということは、本来オリジンがないはずであるのに（これについては後述する）、それではマルチニックの現実から離れてしまう。だからこそ、セゼール後の世代のシャモワゾたちは、クレオールであること、すなわち「クレオール性 *créolité*」を積極的に受け入れようとする。セゼールが「黒人性 *négritude*」を積極的に受け入れたように。シャモワゾとコンフィアンの共著『クレオール文学 *Lettres Créoles*』（1991年）は、クレオールの文学を歴史的に見直すことで、それを確認しようとする作業であったように思える。第2章で述べるように、クレオールの文学について語ることは、そのまま「クレオールの歴史」を、「クレオールとは何か」を語ることに繋がるからである。それは息子たちによる「父」への批判であり、「父」を克服し、自立へと向かおうとする企てと言えよう。

セゼールの政治家としてのキャリアの最後の年に、シャモワゾの『テキサコ *Texaco*』が、その前年にはコンフィアンの『コーヒーの水 *Eau de café*』が発表されていることは、何やら示唆的である。彼らは、自分たちそれぞれの作品で、「クレオール性 *créolité*」に依拠する新しい作品のモデルを示すことができたのだろうか。

3. 三角形の構図

『テキサコ』を構成する言葉の一番太い流れは、マリ＝ソフィから「言葉の聞き書き係」への語り〔図1のパロール①〕を書き取った「聞き書き係」の文章〔エクリチュール①〕（読者へと差し出されている）である。パロール①とエクリチュール①は意味内容としては同じと考えられるが、その間には前項で述べたような翻訳＝変換が行われている。作品内では、エクリチュール①はパロール①の場所に、パロール①に代わって現れていることにも注意しておかねばならない。

さらに、作品内を観察してみると、他にもいくつもの言葉の流れが行き交

っていることが分かる。マリ＝ソフィから「言葉の聞き書き係」へ（その延長上に「聞き書き係」から読者へ）という一方向の流れだけがあるのではない。「言葉の聞き書き係」は彼女に多くの手紙を書き送っている〔エクリチュール②〕のである。そこには彼女の話の内容への感想や疑問などが書き綴られている。（手紙はシェルシェールの図書館に文書として保存されていることになっており、小説の中では文書番号つきで登場する。）これによって彼らの間には、作品内の言語の上でも、パロールとしてのクレオール語とエクリチュールとしてのフランス語という違いはあるものの、双方向的な言葉のやりとりが存在することになる。

さらに興味深いことに、マリ＝ソフィはある時から、ノートを付け始めている。自分の記憶を整理するための覚書のみならず、自分自身が語っている事柄への考察も含んでいる。これはもちろんフランス語で書かれる。つまり彼女はクレオール語で「語る人」とともに、フランス語で「書く人」という面も持つ。書き言葉は、彼女にとってもやはりフランス語なのである。しかも彼女はこれを「言葉の聞き書き係」に渡しており〔エクリチュール③〕、彼はそれを読んだ感想をも彼女への手紙のなかに書く。こうして「語る人」と「聞き書き係」の関係の裏には、書き言葉＝フランス語による交流（エクリチュール②と③）も存在していることになる。

土地の言葉で語られるその土地の人々の物語を、より普遍的な言語の文章に変換して記録し、データ化するという作業には、多かれ少なかれ、常にある種の「搾取的」な影がつきまとうものである。しかし、こうしたありふれた構図の一つに収まってしまうかねない見かけを持ちながらも、この小説の中には、書き言葉を交換しあうというもう一つ別のルートを設定することを通じて、対等な関係を築く方法のありかを探ろうとする意図が感じられる。それはまた、クレオール人自身がクレオールを描く小説を書く際に、陥らざるにはいられないジレンマと、迂回することなく向き合い、まさにその問題の内部でその解決を求めようとする意図、と言い換えることもできるのではないだろうか。

さらに、見落としてはならないことに、『テキサコ』には、もう一人、書

き言葉を発する人物が存在する。テキサコ地区の人々にとって救世主の役割を果たす、「キリスト」と呼ばれる人物、つまりマルチック出身の「都市計画者 l'urbaniste」である。彼は、最初にテキサコ地区の調査に乗り込んできた時に、すでにマリ＝ソフィの語り〔パロール②〕（「聞き書き係」が書き取っている話と同じ話）を聞かされているらしい。マリ＝ソフィの話が彼を動かし、テキサコの存在状態に触れることで、彼は、都市の整理屋になるのをやめ、「新たな都市計画者」として生まれ変わり、テキサコの人々にとっての「キリスト」になるのである。この彼が自分の考察を記したノートを「聞き書き係」にしばしば送っている〔エクリチュール④〕。（これもまた、図書館に文書として保存されているという設定である。）この「都市計画者」の文章は、「新たな都市計画者」としての覚醒の物語であると共に、彼独自の「都市論」としても読める内容を持っている。

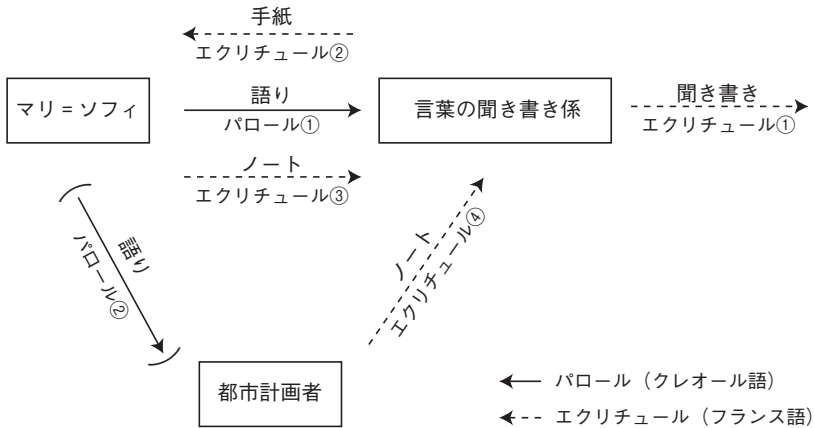
また、「都市計画者」へのマリ＝ソフィ語り〔パロール②〕は、作品のなかに文字として現れることはないが、彼女の語りを聞いて生まれ変わった「都市計画者」が作中に存在することによって（そして彼の発するエクリチュール④によって）、その存在が反映されていると言えるだろう。

そして、「都市計画者」が「聞き書き係」に送るエクリチュール④の存在は、マリ＝ソフィと「聞き書き係」の言葉の重なり合いの外側から、テキサコを語る、ヴァリエーションのような役目を果たしてもいるのである。言葉のやり取りされる空間を客観化し、立体化しているとも言えるような、ある種の奥行きをもたらす効果を持っているのである。

このように『テキサコ』の内部では、いずれも一人称語りではあるが、言葉の向かうベクトルも一様ではない、多種類の文章が共存し、つりあいの取れた三角形の構図を形作っていることが観察される。

しかも、小説全体で見ると、「言葉の聞き書き係」からマリ＝ソフィに〔エクリチュール②〕、マリ＝ソフィから「言葉の聞き書き係」に〔エクリチュール③〕、「都市計画者」から「言葉の聞き書き係」に〔エクリチュール④〕、という3種類のエクリチュールは断片的なテキストとして（一つ一つの保存文書という顔で）、「言葉の聞き書き係」が記す聞き書きの（つまり

図1 三角形の構図



パロールの翻訳としての) エクリチュール①の間に、必ずしも順番ではない並べ方によって、精妙に差し挟まれているのである。このようなエクリチュールのモザイク状の構成全体を含みこむものとして、小説『テキサコ』を築き上げているのは、「聞き書き係」をも構成要素の一つとして操る作者シャモワゾだということを指摘しておかねばなるまい。

さらに、図書館に文書として保存される、すでに固まったものとしてのテキスト〔エクリチュール②・③・④〕と、現在進行中の語りを書き言葉に置き換えていく「聞き書き係」の、いわば生成途上のテキスト〔エクリチュール①〕とを共存させることが、文字のみでできた書物『テキサコ』の内部に独特のダイナミズムを与えていることに気づくならば、作者の目論見と力量を改めて感じることができるだろう。

小説に盛り込まれた問題意識のなかに色濃いくレオール性を見出すことが出来る一方で、シャモワゾのこの研ぎ澄まされた方法意識は、まぎれもなくフランス現代小説のものであると言える。

第2章 いくつかの反映

さてここからは、シャモワゾの小説の独特の調べに乗りながら、その「クレオール性」の諸相が反映されている部分に焦点を当てていこう。

I. 第1の反映：「語り部」の力

文字を持たないクレオール語を母語とする人々にとって、言葉とは語られるもの＝パロールである。書かれる言語＝エクリチュールは、印刷という工程を介して書物になり、大量に複製されることによって流布し、保存され、その一部が「文学」を形成する。それに対してパロールは、語られる現場にしか存在しえない。従って常に身体と共にあり、「ライヴ」の状態においてのみ生息する。その場に居合わせてそれを聞いた者が記憶しておかなければ、その場限りで消えていく運命にある。残っていくためには、記憶を媒介として、人から人へ語り継がれていくことが必要になる。身体の、命の継続と共にのみ、パロールも継続していくのである。

このようなパロールの存在様態を考えると、クレオールのアビタシオンの中に生まれた「語り部 le conteur」という存在の重要性に気づかされる。かつて、アビタシオンの中で、奴隷たちは一日の労働のあと、夜になるとかがり火を囲んで集まり、そこで「語り部」がさまざまな物語を語って聞かせた。そこに共に暮らすことになった人々の家族や先祖や親類や知り合いたちの様々な人生の物語、あるいはおそらくアフリカに由来する集団的記憶を元とするような昔話・寓話の類が、見事な話術によって語られ、聴衆もそれに合いの手をいれながら参加して、場を盛りあげていく。労働のあとの夜の娯楽であったが、奴隷たち同士の重要な情報も、監視役の白人たちにわからないようなコントの形をとって伝えられたこともあったようである。

こうして「語り部」の物語のなかでは、ある生きられた時間の断片が語られるのだが、そこにはそもそも、ある人間が生きながら関わってきた他の様々な人間の生の時間が絡み合っている。さらにそれが次から次と語り継がれていく間に、話を聞いた別の人間の記憶の一部となってその人間の生とも

絡み合い、断片が集積してふくれ上がっていく。語りと記憶の連携プレーのようにして、それは生きていくのである。時間が枝分かれし、分かれながらまた別の枝と絡んでいく様は、ちょうどマルチニックの水辺を覆うマンガローブの木の繁茂を思わせる¹¹⁾。

文字を持たなかったクレオール歴史は、このようなパロールによって語り継がれる形でしか存在し得ない。ある人間によって語られるときは、枝分かれするいくつもの時間は、支流として残りつつも、より大きな語りの流れの中に合流していく。だが、支流と本流という差は、相対的なものである。あるときは支流を形成するはずの時間は、その時間を中心的に生きた人間から語られるときには本流となるのであり、今度は先の本流と思われたものが支流となって流れ込んでくる。そうした相互的、相対的で、互換的な関係にあるような、多くの流れの集積なのである。この流れは、誰かが語り続ける限り涸れることはない。無数の物語の「繋がり／集まり」（ネットワーク）としてしか存在しえなかった歴史。従ってそのこと自体が、どのような状況の下でも、とりあえず生き残ることを第一の選択肢としてきたクレオールの民の「生き延び方」を肯定するのである。

このような歴史は、文字で書き残される体系化された歴史の持つ、ツリー状の時間の構造とは違っている。つまり大文字で単数の歴史 l'Histoire とは違って、無数の形をとりうる、本来的に複数としてある歴史 les histoires (あるいは les histoires des histoires) である。

だが、l'Histoire は、たとえばクレオールの歴史をほとんど記述しない。世界史のなかで、「西洋に発見されて」突然登場するその場所は、「西洋の世界化」という歴史的暴力によってクレオール化された後は忘れられてしまい、西洋から独立しようと動き始めたときに、ようやく再び l'Histoire に登場してくる。その間の長い時間はほとんど光を当てられないことがない。

おそらく、セゼールによる「ネグリチュード運動」後の世代のクレオールの作家たちが、小説という形式を選択し、その作品の多くが les histoires des histoires のような形をとるのは、文学の世界にこそ、そうしたクレオール独特の「遺産」が息づく領域を見出したからであろう。

このように考えてくると、シャモワゾの『テキサコ』は、その代表的存在であったことが改めて感じられる。マリ＝ソフィの語るテキサコの来歴は、まさに上述したような形態で描かれているのではないか。小説という形で *les histoires des histoires* を転生させ、しかもマリ＝ソフィという強い魅力を持つ語り手を造形したことで、そこに熱い血と命を通わせることを可能にしたのである。

しかし、ここに再び、語りを「聞き書きする」際の問題が浮上してくる。クレオール語をフランス語に、という以前に、パロールをエクリチュールに翻訳する、ということのなかにある超えがたい障壁。「聞き書き係」はしばしばそのことで悩む。パロールの持つ表現力のすべてを書き言葉に置き換えることなど出来るものか？ 限界があるのは自明だろうが、いったいどこまで可能なのか？ 自分の書く文章はそれをどこまで伝えられるのか？ そもそもパロールの持続は、パロールを発する者の命の持続と共にある。語りと記憶の連携プレーであるとしたら、語り、記憶する者の消滅と共に、その連携は途絶えるのだ。

実際、シャモワゾは1988年に発表した第二作目の小説『素晴らしきソリボ *Solibo Magnifique*』¹²⁾ でこのことを取り上げている。ソリボという無二の「語り部」の死を描いた作品の最後で、この作品のなかの「聞き書き係」は当の問題に直面する。彼はソリボが死んだ夜に語ったことを、残された下書きから再構成できず、記憶の中のパロールと残されたエクリチュール（あるいはこれから書くべきエクリチュール）との間の障壁を越えられずに行き迷ってしまう。そして、せめて何らかの助言を求めて「最後のマントー *le dernier Mentô*」¹³⁾ と言われている土地の古老パパ・トトヌ *Papa Totone* を探していたおりに、初めてテキサコ地区と出会うのである。『テキサコ』の最終章「復活」（マリ＝ソフィの語りの聞き書きではなく、「聞き書き係」自身の文章である）の冒頭でこのことが書かれており、『素晴らしきソリボ』と『テキサコ』の繋がりが明かされる。そしてその短い最終章にはまた、「インフォーマント」であるマリ＝ソフィの死も描かれる。彼女を映画によって記録するというアイデアをあきらめ（機材が語りを抑圧し変形すること

を避けたからである)、つつましいテープレコーダーのスイッチさえ切って、彼女の話にひたすら聞き入り一体となろうとした日（「聞き書き係」とは書く人である前に、まず「聞く人」なのである）の記憶のあと、老衰の果てに死んだ彼女を発見するくだりが書かれている。

「その時私は、自分に課されている要求の重さにうちひしがれた。可哀相な聞き書き係……おまえは何も知らないんだ、死が打ち砕いてしまったこの大伽藍を建て直しかつ保存するために知っていなければならぬことを……」（『テキサコ 下』 p.279）

Je me trouvais alors anéanti par le poids de l'exigence qui s'imposait à moi. Pauvre Marquer de paroles... tu ne sais rien de ce qu'il faut savoir pour bâtir/conservé de cette cathédrale que la mort a brisée... (*Texaco*, p.425)

しかし「語り部」ではない彼にとって、自分の身体の一部となった彼女の語りの記憶を、「書く人」として受け継いでいく以外に方途はないのである。パロールではなくエクリチュールをもって連携プレーに参加していく以外に彼の仕事はない。自分の書き言葉への不安と自負の間で揺れ続けながら。クレオール作家の、それが宿命ということだろうか。

Ⅱ. 第2の反映：クレオールにとっての書き言葉

1. 「書くこと＝死ぬこと」について

前項の最後で述べたことは、『テキサコ』のなかでは、もう一つ別の形で描かれている。そこでは、クレオール語をフランス語にする際の「越えられない障壁」が描かれるのだが、もちろんこれはパロールからエクリチュールへの転換における障壁と同種のことである。

マリ＝ソフィが「語る人」とすると共に「書く人」でもあるという二面を持っているという点は、第1章の三角形の構図を述べた項でふれたが、彼

女はまさに「書く人」として、「聞き書き係」と同じ問題に行き当たるのである。とりわけ、最愛の父エステルノームについて書こうとするとき、この問題は彼女を深く悩ませる。それが描かれる部分の小見出しは、いみじくも「書くこと＝死ぬこと ÉCRIRE-MOURIR」である。

「この頃、私は書くことをはじめたんだ、つまり、少しばかり死ぬことをね。私のエステルノームから言葉を借りはじめてからというもの、死ってやつが感じられた。父さんの言っていた文句のひとつひとつが、私から父さんを遠ざけていった。(略) 私にとって書くってことはフランス語で書くってことで、クレオール語で書くわけじゃない。じゃああんなにクレオールだった私のエステルノームをどうやってそこに持ってくればいい？ (略) 時折ふとわれに返ると、(父さんをもう一度見つけ出してここにいてもらおうとしているのに) 自分が父さんを見失い、自分のなかで殺してしまっているのに気づいて涙しているんだ。書かれた言葉たち、私の貧しいフランス語の言葉たちが、父さんの語った言葉の木魂を永久にかき消し、私の記憶に裏切りを刻み込んでしまうのさ。」(『テキサコ 下』 p.181)

Vers cette époque oui, je commençai à écrire, c'est dire : un peu mourir. Dès que mon Esternome se mit à me fournir les mots, j'eus le sentiment de la mort. Chacune de ses phrases l'éloignait de moi. (...) écrire pour moi c'était en langue française, pas en créole. *Comment y ramener mon Esternome termment créole ?* (...) Parfois, je me surprénais à pleurer de voir comment (le retrouvant pour le garder) je le perdais, et l'immolais en moi les mots écrits, mes pauvres mots français, dessipaient pour toujours l'écho de sa parole et imposaient leur trahison à ma mémoire. (*Texaco*, p.353)

「聞き書き係」とマリ＝ソフィが共有する問題のなかに、フランス語で書

くことを選択したクレオール作家たちが、みな体験せざるを得ない葛藤を読み取ることもできるだろう。シャモワゾは自分自身の葛藤を登場人物たちに反映させているのである。

ところで、『テキサコ』に限らず、シャモワゾがクレオールを描いた作品のフランス語に見られる明らかな特徴についても、ふれておかねばなるまい。しかし、翻訳者がいずれも頭を悩ませる点であるらしく、きちんと論理化して説明するのが難かしくもある。ところどころに、クレオール語の音を映したような表記や、クレオール語を基にした造語らしきものが見かけられる。フランス語の綴りに置き換えてはいるが、意味はクレオール語の意味のまま用いている単語があったり（人を食ったようにわざわざ注がつけられていたりする）、クレオールの諺や決まり文句を下敷きにした表現を用いたり、クレオール語の文法システムを勝手にあてはめてフランス語の用法を捻じ曲げてみせたり……知っていれば気がつくし、それなりに想像がつくが、知らなければピンと来ない、といった箇所にはしばしば行き当たる。それでも、全体として意味が分からなくなってしまうわけではないので、あまり気にしないでいると、実にリズムのよい活気のある文章に引きずられて読み進むうちに、いつの間にか、そのクレオール化されたフランス語に慣らされてしまって、その独特な魅力に嵌っている。要するに、秘かにではあるが、かなり戦略的に、フランス語にクレオールの血を通わせてしまっているのである。作品の構築における緻密な方法意識と、このどこか愉快的なくらみに満ちた「組み換え」と。シャモワゾのしなやかな戦略を感じることができるだろう。

それにしても、話し言葉の命を失うことなく書き言葉に置き換えることは、はたして可能なか？ 燃え上がっては一瞬で消えていく話し言葉に永遠の命を与えるために、別な形に転生させ、同時に書き言葉には、その消える寸前の話し言葉の命を吹き込むこと。双方の命が共存できるような表現のありかを、クレオールの作家たちは探しているのではないだろうか？ 探求の果てにはあり得るかもしれないその表現の形は、現代の「オラリチュール

oraliture」¹⁴⁾とでも言えるものになるのだろうか。『テキサコ』の語りの構造のなかで、シャモワゾはその一つの可能性のモデルを提示しているように筆者は感じる。まだ完成しているとは言えないまでも。

2. マリ＝ソフィとセゼールとの対面

しかしシャモワゾは、同じ『テキサコ』のなかに、語り（ここでは朗読という形のだが）と書かれた文字との幸せな融合の場面も描いている。女闘士マリ＝ソフィとフォール・ド・フランス市長エメ・セゼールの感動的な対面の場面である。

テキサコ地区の住環境の改善を求めため、マリ＝ソフィの提案で、とうとう住民たちは、フォール・ド・フランス市長セゼールに直接請願に行くことにする。それも請願者がつめかける市役所ではなく、セゼールの自宅にである。早朝に、勇敢な女達がセゼールの屋敷に許可を待たずに入っていくと、偶然ベランダに出ていたセゼールその人に見咎められる。その時マリ＝ソフィは、とっさの思いつきで、大好きなセゼールの『帰郷ノート *Cahier d'un retour au pays natal*』の一説を大声で暗誦してみせる。セゼールは心を動かされて、彼女らを迎え、請願に耳を傾ける。帰り際にセゼールに、『帰郷ノート』を本当に読んだのかと問いかけられて、マリ＝ソフィは、「読みました、ムッシュー・セゼール」と答える¹⁵⁾。

この場面でセゼールの心を動かしたものは、彼が故郷に捧げたあの詩、すばらしいフランス語で書かれた詩が、この土地のまぎれもなくクレオール的女性によって読まれ、記憶されて、朗読されたことにあるのだろう。つまり、彼の生み出したエクリチュールが（とはいえセゼールの詩は、読んでいると声に出してみたくなる衝動にかられることも確かである）クレオール女性の身体の一部となり、彼女の声によって生きた言葉となって再生する、幸福な瞬間に立ち会うことができたからである。クレオールの作家にとって、おそらく最も幸せを感じる瞬間ではないだろうか。この場面を造形したシャモワゾの想像力には、脱帽せざるを得ない。

だが、この場面に入り込むことができなかった、もう一人の登場人物のこ

とも思い出しておきたい。テキサコ住民のなかの一番のインテリ、チ＝シリクである。ハイチから流れてきたらしいこの男は、本国のフランス人以上に正しいフランス語を話し、書くことができる。テキサコの文書係や書記を几帳面につとめている彼は、フランス文学に対する造詣も大変深く、歴史上の名作をほとんど読破しており、なかなか理解も深そうである。マリ＝ソフィにセゼールを、『帰郷ノート』を教えてくれたのも彼である。彼女の書くフランス語にも目を通しては、批判してくれる。「聞き書き係」の仕事を、文学的には無価値だと切り捨てるのもまた彼だ。チ＝シリクはもちろん詩人セゼールを敬愛しており、先の請願のときもセゼールの家の前まで一緒に来るが、他の男たち同様なかに入る勇気がなくて玄関の前で待っている。セゼールの本を何冊も、サインをもらうつもりで持ってきていたにもかかわらず、こうして彼は一生に一度のチャンスを逃してしまうのだ。

このかわいそうな愛すべきチ＝シリクは、あくまで書物の人、フランス語の人、エクリチュールの人として造形されているのだ。それ故に、彼は気の毒にもセゼールとは対面できない運命にある。シャモワゾは、クレオールの生真面目な古典的インテリの戯画として、この男を描いているのだろうか。シャモワゾは自分の身の内にもチ＝シリクがいることを自覚していたのかもしれない。「聞き書き係」のなかのみならず、チ＝シリクにもシャモワゾが潜んでいる。そのせいか、この人物を描く辛辣な筆致のなかには、少しばかり愛もこもっているように感じられる。

Ⅲ. 第3の反映：クレオールの「アイデンティティ」？

『テキサコ』の翻訳者である星埜守之が、そのあとがきの中で述べているように、クレオールに独自なところは、実は「欠如」（欠如性）なのではないだろうか？

クレオールと呼ばれる地域に住む人々は誰もその土地に起源を持っていない。とりわけアンティール諸島においてはそうである。もともとこの土地に住んでいた人々はヨーロッパからやって来た白人たちによって殺戮され、さらには彼らのもたらした疫病（その土地の人間には免疫の無い疫病）によっ

て全滅してしまっている。生き残った原住民族が存在した大陸部とは、そこが違う点である。アフリカから奴隷として強制的に連れて来られた黒人たちはもちろん、何らかの理由でここに住み着くことになった支配者側の白人たちも、あるいは安い労働力として後から入ってきたインド人や中国人、商人として入ってきたアラビア人など、様々な人種の人々も、誰もが自らの起源とは切り離されてこの土地にいる。オリジンから切り離された状態が、彼らのいずれにとっても生存の様態としてある。

こうしてそれぞれ異なる起源を持つものが、人種的にも文化的にも混交し、モザイク状に混在・混成しながら、他には見られない独特の社会を形成してきたのである。従って、当然そこには「純粋性」が欠如している。単一の民族・言語・文化の「純粋性」を守るというような価値観は、ここには生まれようもない。同時に、「正統性」とも「固有性」とも無縁である。逆に、共通のオリジンのないものが混在しているというところに、いわばこの土地に独特の特徴がある、という逆説的な事態になってくる。

「起源」「純粋性」「正統性」「固有性」といった伝統的諸価値の欠如は、一般にはネガティブな「欠陥」として認知されるかもしれない。しかしながら、それらの諸価値が至りつきかねない危険な袋小路、例えば「自閉」「排他」「硬直」といった病（その代表的な症例としてラシズムがある）のことを考える時、クレオール的な「欠如」は、逆にそうした袋小路からあらかじめ離脱し、解放されているという意味で、ポジティブに転換しもあるだろう。

アイデンティティという堅固に閉じた基盤を持たない、持てないが故に、別の次元のアイデンティティ、他者へと開かれた一種複合的なアイデンティティ（そうなると別な単語が必要かもしれないが）とでも呼べるものの可能性を、クレオールの存在様態は示してくれはしまいか？ だか、多分に願望の混じったこの予測を、早計に語るのは自重しておこう。本論文では詳しく言及し得ないが、現代のクレオールにおける混沌状態はより複雑化しており、必ずしもポジティブな展望につながらない側面も示し始めている。

その前に一つ、確認しておかねばならないことがある。言ってみれば、近代における「西洋の^{グローバリズム}世界化」の副産物として生まれてしまったクレオールが、

自らが生み出された経緯を「歴史の暴力」として断罪することは難しくない。しかし、クレオールが上記のようにオリジンなきものの混在をポジティブに捉えなおそうとするならば、西洋による植民地化の歴史を、自らを生み出したものとして認知しなければならないだろう。ただし、『クレオール文学』（邦題は『クレオールとは何か』）の翻訳者西谷修氏が解説のなかで熱心に述べているように、それは決して自嘲的な態度ではない。なぜなら、「歴史の暴力」によって産み落とされたものが、すなわちクレオールの存在様態そのものが、西洋の歴史の原理を換骨奪胎する可能性もまた秘めているからである。

このような視野で見ると、クレオールの作家たちがフランス語を使ってクレオールを描くということは、支配の言語に身を摺り寄せる選択にも見えながら、その実、クレオールの状況を生み出したフランスの言語によって、クレオールを忘却することなく記憶させておく（まさに支配の言語であるフランス語によって記憶させておく）ことを企むという、逆転を孕んだしたたかな戦略に基づいていることが見えてくる。

第3章 終わりに代えて——ゆるやかな危機について——

様々な言葉の絢爛たる織物のような『テキサコ』のなかには、数少ない重要な言葉を発しはするが書き言葉には全く関わってこない、ブラックホールのような不思議な登場人物がいる。テキサコ地区のはずれの鬱蒼とした木々に囲まれた場所、ドゥームに住むパパ・トトーンである。テキサコの住民たちから「最後のマントー」ではないかと思われる人物である。「聞き書き係」がこの人物を探したことがテキサコと関わるきっかけを作ったことは、すでに述べたとおりであるが、彼がドゥームを尋ねたときには、その場所は廃墟と化しており、その人物も既にこの世にいなかった。

マントーは、クレオールの伝統的文化・習俗のなかで、語り部と同様に重要な存在であった。街から離れた場所に一人で住み、特別な力を持つ者として敬われていた。古くから伝わる知恵をもって、一種の呪術師のように、ある時は民間療法の知識を発揮して病気を治療したり、精神的な癒しを与えた

りする。様々な局面で、個人や集団に忠告を与える場合もある。

アフリカから連れて来られた黒人奴隷のなかには、アビタシオンから逃げ出して山の上に集落を作って暮らした者たちがおり、彼らは「逃亡奴隷（マルーン）」と呼ばれていた。クレオール社会の階層のなかでは一番下に位置づけられていたが、平野部とは隔絶して、独立した社会を形成していた。平野が奴隷として生きる場所であったのに対して、山は自由と独立の場所、白人の支配の及ばない場所であり、ある意味で奴隷たちの憧れの場所でもあった。そこでは都市部の西洋化の影響を受けずに、アフリカからの民族的な知恵の遺産がいくばくか保存継承されてきたらしいが、マントーはそうした古い知恵を受け継ぐ、特別な能力を備えた者とみなされていたようである。

小説中でテキサコ地区は、解放された奴隷たちが一時、山（「モルヌ」と呼ばれる）に上がって暮らしたあと、平野に下りてきて、街の周辺部に勝手に住み着いて作った集落のようなものの一つ、と設定されていることを思い出すならば、テキサコはいわば平野のなかに食い込んだ山であると言える。だとすればそれが、かつてのアビタシオンに代わって平野を支配している「街場」の論理と戦わざるを得ない存在であることが、多層的に理解されてくるだろう。

「最後のマントー」と言われていたパパ・トトヌの場所、魔界にも似た場所ドゥームを、その端に抱え込むようにテキサコ地区が作られているということも、その意味で重要なのである。パパ・トトヌは、何度もマリ＝ソフィの身体的肉体的な危機を救い、少ないながら貴重な「言葉」^{パロール}を彼女に与えている。

シャモワゾは、「言葉の聞き書き係」のエクリチュールを借りて、彼自身のマントーの捉えかたを述べている。クレオールを形作っているオリジンを異にする諸民族によるモザイク状に入り組んだ想像世界を、「糸を撚り合わせるように」ひとところに集結させてきた存在として¹⁶⁾。

「最後のマントー」とは遭遇できず、その代わりのように知り合った「インフォーマント」をもやがて失うことになる「聞き書き係」は、語り部やマントーたちによる街場との闘ぎ合い、彼ら独自の戦いに共感する一方で、街場

の侵食がさらに進んでいく様子を敏感に感じ取ってもいる。『テキサコ』の最終章「復活」のなかで、やや唐突な印象を与える一節に目を留めてみよう。

そこで彼は、「もうひとつの想像世界の呪術的展開によって、抗いがたいイメージの数々となった世界が、画一化をもたらす氾濫をおこすこと」による危機を指摘している¹⁷⁾。「もうひとつの想像世界」とは、恐らく近代以降に生じた、「映像」による想像世界の恐るべき展開力のことを指していると思われる。視覚に訴え、無数の複製を生むことのできる「映像」が氾濫して、言葉による想像世界とは別の世界を作っていること。さらに様々なメディアの誕生とその氾濫。マルチニックも例外ではないだろう。例えば、今日のマルチニックでは、テレビの普及により、日常の言語がクレオール語からフランス語に移行しつつあるらしい。(似たような現象は世界各地に起こっている。テレビから聞こえてくる標準的で一様な言語の浸透力は想像以上のものがあり、地方的・周縁的・個別的な言語の揺れを消していく。)そして、映像と言葉が結託して、一方的に発信され続ける「情報」としてのメッセージの強力さ。その抗いがたい伝播力は、いかなる強制も感じさせないままに入り込んできて、いつのまにか周囲を画一化していく。だからこそ我々はそれに無自覚で無抵抗であり、ふと気がつけば、「伝統的な抵抗がまだ知らなかったいくつもの新しいやり方」に支配されているのである。テレビに限らず、現代的なあらゆるメディアは、同様な力を持っている。クレオールにおいては、ことはより深刻であろう。彼らが生き延びることによって受け繋いできた、「クレオール性」の象徴であるような想像世界が、今や危機に瀕している。

だが「聞き書き係」が述べている危機感は、今や世界の至るところで、様々な規模で、様々な層で、一見ゆるやかにしかし確実に進行しつつある危機なのではないだろうか。私たちを脅かしているのは、彼の言葉を借りるならば、「もはや軍靴でも剣でも鉄砲でも、あるいは、西洋的「存在」による金融支配でもなく、各民族の特質の違い、嗜好の違い、感情の違い……——そして想像世界の違いが浸食されてゆくことなのだ。」

それをもっとも敏感に感じ取っているところに、まさしく「クレオール性」のもつ感度の鋭さが示されているように思う。

ところで、既にふれたように、「聞き書き係」はマリ＝ソフィの語りを記録する手段として映画を意識しながらも、結局それを選ばなかった。先の「もうひとつの想像世界」^{イマジネール}についての下りを読むと、「聞き書き係」の選択のなかには、言葉で表されていないより深い逡巡がありそうに思えてくる。視聴覚機器の使用は、語りをその内容だけでなく、語る存在そのものをまるごとライブで記録できるのであるから、保存手段として魅力的でないわけではない。その魅力には看過できないものがある。だからこそ、それを使おうとするならば、表現者は両刃の剣の危うさに、とりわけ敏感でなければならないだろう。

シャモワゾは、それを選ばなかった。彼は、どれほど優れた複製が作れるとしても、「もうひとつの想像世界」^{イマジネール}の側にとりこむことで、「クレオールの想像世界」^{イマジネール}とは別なものに変換してしまうことを避けたのだろうか。だとすれば、「聞き書き係」＝シャモワゾは、あくまでも「クレオールの想像世界」^{イマジネール}である「言葉」^{パロール}の世界にとどまりながら、「インフォーマント」の語りをまるごと再生する方法を探求することを選んだのだということになる。小説という形式が、それを可能にしてくれたのである。テキサコ地区とマリ＝ソフィという生き生きしたイメージをエクリチュールによって造形し、クレオール語のパロールとしての命をそこここに注ぎ込み、フランス語をそっとクレオール化しつつ、書かれた言葉の力を増幅させた『テキサコ』という作品は、小説という形式を新たに選びなおすことによって生まれたのである。

『テキサコ』は、その作品の形式と構造においても、またそれらに反映させている様々な問題とその思考においても、問題意識の射程においても、極めて「現代的」な作品であると言えるだろう。

註

- 1) フランス語圏の映画の世界では、マルチニック出身の女性監督ユーザン・パルシー Euzhan Palcy による「Rue Cases Nègres」(1983) (日本公開時の邦題は『マルチニックの少年』) があげられるだろう。1983年

のヴェネチア映画祭で銀獅子賞（新人監督に与えられる最高の賞である）を獲得して、注目をあびた。少年の目を通してマルチニックの社会を活写した傑作であった。

- 2) Rafaël Confiand, *Eau de café*, Grasset, 1991
邦訳は『コーヒーの水』、塚本昌則訳、紀伊國屋書店、1999年
- 3) Patrick Chamoiseau, *Texaco*, Gallimard, 1992
邦訳は『テキサコ』（上・下）、星椋守之訳、平凡社、1997年
本論文中的『テキサコ』からの引用部分の日本語は、星椋氏の使用させていただきました。
- 4) Patrick Chamoiseau/ Rafaël Confiand, *Lettres créoles : tracés antillaises et continentales de la littérature, Haïti, Guadeloupe, Martinique, Guyanne 1635-1975*, Hatier, 1991
邦訳は『クレオールとは何か』西谷修訳、平凡社、1995年
- 5) Jean Bernabé/ Patrick Chamoiseau/ Rafaël Confiand, *Eloge de la Créolité*, Gallimard, 1989
邦訳は『クレオール礼賛』恒川邦夫訳、平凡社、1997年
- 6) 『テキサコ』の翻訳者星椋守之氏は「訳者あとがき」のなかで、本来のフランス語では「街へ」とか「街で」とかいう意味のある *en ville* という語句を名詞化して作られた言葉であるこの語は、フランス語で「街」というのとは違った方向性や運動性を帯びており、それに対応させるための訳語として「街場」という語を採用した、と述べている。
- 7) マルチニック、グアドループ、ハイチ、ギアナなどの、フレンチ・クレオール地帯の産業は、植民してきた白人の経営するプランテーション（フレンチ・クレオール地帯ではアビタシオンと言う）における農業であり、主にサトウキビを栽培し、砂糖を生産して販売することで成り立っていた。労働力としてアフリカから強制的に連れてこられた黒人奴隷たちと、彼らを使用する白人たちとは、当然言葉が通じないわけで、労働現場のための言葉が必要であった。そこで命令する側の白人の言葉（この地域ではフランス語）が簡略化されたものが用いられるようになる。従って、基盤になった言語によって、フランス語のクレオール、スペイン語のクレオール、英語のクレオールなどがあり、地域によって少しずつ異なる。

フランス語のクレオールは、フランス語が西アフリカ諸語の影響を受けながら変形して出来たらしいが、成立過程はよくわかっていない。訛りや方言ではなく、独立した言語システムであると考えられている。語彙の多くはフランス語に借りているが、名詞の性や認証による動詞の活用

がない、などの特徴を持つ。17世紀前半のフランス人の入植から、わずか50～60年という驚くべき短期間に成立した。黒人奴隷同士も、それぞれが別の地域から連れて来られているので（同じアビタシオンには同じ地域から来た黒人を故意に集めないようにして、彼らが共謀して反抗するのを防いだとも言われている）彼ら相互間のコミュニケーションの言語としてもそれは役立った。さらに、その後これらの地方で生まれた世代にとっては、それが母語となって受け継がれてきた。

- 8) マルチニック出身の精神医学者フランツ・ファノン Frantz Fanon は『黒い肌、白い仮面 *Peau noire, masques blancs*』（1952）で、そのような、自らの現実を否定してフランスに同化させようとする、マルチニック人のアイデンティティのねじれを分析している。
- 9) 1941年、ヴィシー政権下のフランスからメキシコに逃れようとしていたブルトンは、ニューヨーク行きの船に乗るが、船はマルチニックのフォーール・ド・フランスの港に強制的に寄港させられ、下船させられる。町に降りたブルトンは娘への土産にリボンを買うため小間物屋に立ち寄り、待ち時間の間にたまたまサロンに置いてあった雑誌を手にとり、セゼールの詩に目をとめる。それはフランス留学から戻っていたセゼールが、この年にルネ・メニル René Ménil と共に創刊した文学雑誌『トロピック *Tropique*』であり、しかもその小間物屋の女主人はメニルの妹だった。セゼールの詩に感動したブルトンは本人に会わせてもらい、セゼールはすでに39年に別の雑誌に発表していた詩『帰郷ノート』の抜き刷りをブルトンに贈る。戦後帰国したブルトンが自らが序文を付した単行本の形で、『帰郷ノート』は47年にフランス本国で出版された。
- 10) Aimé Césaire, *Cahier d'un retour au pays natal*, in revue *Volonté* n.20, 1939
Aimé Césaire, *Cahier d'un retour au pays natal*, Bordas, 1947
- 11) マングローヴのイメージは作中にも何度か現れる。ことに印象的なのは、「都市計画者」から「聞き書き係」に向けて書かれたノートのなかで、テキサコを「都市のマングローヴ」と表現している箇所であろう。マングローヴの林が、無秩序で自然に有害な繁茂のように見えて、実は水辺の生態系を守る命の揺籃であることに喩えて、テキサコを「都市のマングローヴ」と彼は呼ぶのである。（cf. *Texaco*, p.289）
- 12) Patrick Chamoiseau, *Solibo Mgnifique*, Gallimard, 1988
- 13) マントーとは、クレオール伝統的文化・習俗のなかで語り部と同様に重要な存在である。古くから伝わる知恵をもった、一種の呪術師のようなものである。詳しくは本論文第3章を参照。

- 14) オラリチュール *oraliture* とは、文字による「文学」が確立する前にあった「口承」による詩や物語などの文学の形式に対する研究の中から生まれた語である。語源的に「文字」の意を含んでいる *litterature* という語を用いた「口承文学 *litterature oral*」というような呼び方の矛盾を避けるために作られた造語であるらしい。このような形式は中世のヨーロッパ各地に見られたもの（吟遊詩人の詩など）であるが、文字に依拠せず、書物という形をとらない独特の表現形式である。ただし、後世に残ったのはやはり文字の力を借りることによってであった。
- 15) cf. *Texaco*, p.402-403
- 16) cf. *Texaco*, p.422
- 17) cf. *Texaco*, p.422-423 : Mais L'En-Ville — par le déploiement sorcier d'un autre imaginaire, par l'irruption uniformisante du monde en d'invincibles images — les ballotta comme de vieux flots et les usa au dernier bout. La disparition de nos Mentô révélait (ô silencieuse douleur) la domination de notre esprit selon des formes nouvelles, méconnues des résistances traditionnelles. Les peuples n'étaient plus menacés par la botte, l'épée, le fusil ou les dominations bancaires de l'Etre occidental, mais par l'érosion des différences de leur génie, de leurs goûts, de leurs émois... — de leur imaginaire.
- 『テキサコ 下』 p.275 参照